宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

大分県域における飲酒嗜好の地域的展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2014-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 周作 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4819

宮崎大学教育文化学部紀要　社会科学　第30号（2014）11-36頁

大分県域における飲酒嗜好の地域的展開

中村　周作

The Regional Development of Alcohol Preferences in Oita Prefecture

Shusaku NAKAMURA

1．はじめに

1）研究の目的

酒は，人類が生み出した最高の文化の一つであり，地理学においてもその生産や消費に関する様々な既存研究がみとめられる。たとえば，酒の消費に関する研究として世界の主要な酒文化を概観した水津（1976），ワインの消費に関する多田（1983，1988），寺谷（2002），ビールの消費に関する日野（1988），球磨焼酎に関する八久保（1996）などがある。ちなみに，臼井・張（2010）では，酒に関する既存研究レビューとして101編の論文，著書等が取り上げられているが，その多くが酒，特に清酒の製造に関わるものであり，酒の文化や地域的嗜好についての研究の少ないことが指摘されている。

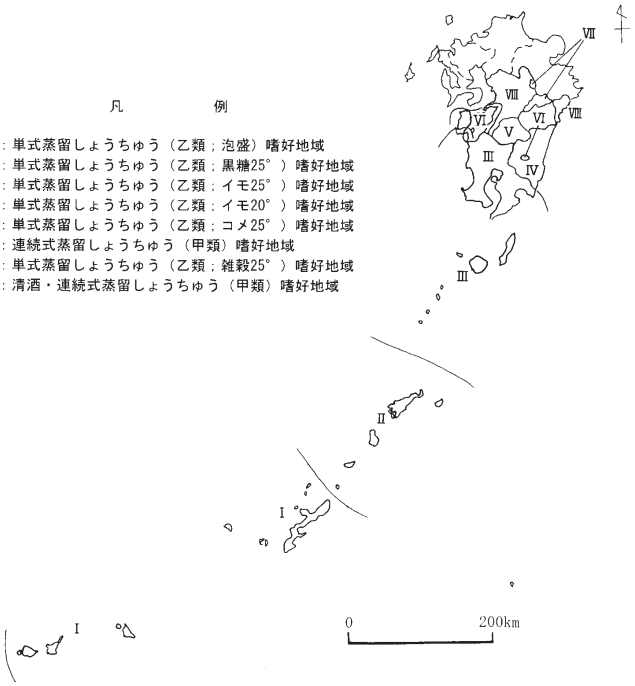
文化の地理学的研究も多岐にわたる成果がみられる。ただし，特定文化の地域的な広がりを表す文化圏に関する実証的研究は多くない。たとえば，言語（方言）の地域的分布に関する研究（柴田，1969）や伝統的な民家形態の分布に関する研究（杉本，1969）などは，そういった研究例と言えよう。文化圏に関する研究が少ないのは，調査方法のむずかしさに主因がある。本研究も，個々人の趣味の範疇に属する酒の好みに通底する地域性を見出すことを目指すものであるが，住民全員に対する聴き取りが不可能な以上，精度の高いサンプル調査の実施が大きな課題となる。

こういった理由もあって，従来等閑視されてきた飲酒嗜好の地域的展開に関する研究として，筆者は，先に宮崎県域を事例として地域によって好まれる酒類の違いとそういった飲酒嗜好地域が形成されてきた過程，およびその背景について明らかにした（時吉・中村，2005；中村，2009）。それによると，焼酎嗜好県として一括して捉えられがちな宮崎県域であるが，その中に６つの酒類嗜好地域の展開がみとめられた。すなわち，①鹿児島県境に位置するえびの・串間地区：25°単式蒸留[1]のイモ焼酎地域，②県央以南の主要地域：戦後，税率の安い20°単式イモ焼酎に変化した地域，③熊本県境の米良地区：球磨地方から持ち込まれる25°単式のコメ焼酎地域，④県北延岡地区：清酒と連続式蒸留しょうちゅう[2]地域，⑤延岡後背地（入郷地区）：連続式蒸留しょうちゅう地域，⑥高千穂など西臼杵地区：25°単式蒸留のコメ焼酎から多様な雑穀

焼酎に変化した地域であった。

ちなみに，この研究以前の宮崎県域における飲酒嗜好に関する学問的成果としては，県域の中央で２分して「南がイモ焼酎圏，北が雑穀焼酎圏」とする小川・永山・守谷（2000）があるのみであったことからも，研究の深化を主張することができよう。

筆者は次いで，隣接県である熊本県域を事例として同様の研究を行った（中村，2012）。その結果，熊本県域では５つの飲酒嗜好地域が検出された。すなわち，①熊本県主部：清酒と連続式蒸留しょうちゅう地域，②球磨地区：地元酒から県民酒へと成長した25°単式のコメ焼酎地域，③天草・八代海沿岸地区：連続式蒸留しょうちゅう地域，④水俣地区：南接する鹿児島県から流入する25°単式のイモ焼酎地域，⑤大分県境の北部山間地：大枠としては①に含まれる地域であるが，大分県から持ち込まれるムギ焼酎嗜好が他地域よりも強い地域であった。さらに，これらの２つの研究内容を組み合わせると，中九州以南地域では，一部類推を含め８つの飲酒嗜好地域の展開がみとめられることがわかった（第１図）。



第１図　中九州以南における飲酒嗜好地域の展開

本研究では，宮崎・熊本両県における研究を受けて，さらにこの両県に隣接する大分県域を事例として，飲酒嗜好の地域的展開とその変容過程について究明すること，さらに大きな視野で九州・沖縄を含む地域における飲酒嗜好の展開について考察することを目的とする。

2）研究の方法

大分県全域，および地域的な飲酒嗜好の概要を掴むために，まず，酒類消費に関する公的な統計である『熊本国税局統計書』[3)]を利用する。この統計では，県内９税務署管内ごとに酒類別消費割合とその推移を把握することができる。ただ，主要酒類である清酒，単式蒸留しょうちゅう，連続式蒸留しょうちゅうなどは把握できるが，単式中のムギ・イモ・コメなどの内訳や，実際に酒に関わっている現場の声などは，当然ながら得ることができない。そのため，そういった酒類消費の詳細を把握するための現地調査が必要となってくる。現地調査，すなわち本研究の場合，個人の嗜好を反映する地域文化圏の析出方法として，先述のように全県民への聴き取りアンケートが物理的にできない以上サンプル調査に頼らざるを得ないわけであるが，それによって精度の高いデータを得ることが，実は大変むずかしい。本研究でも，宮崎・熊本両県域における調査と同様に，各地の小売酒販店を聴き取りアンケート調査の対象とした。長い経営期間を通じて地域に根付いてきた店舗は，現在でも地元の一定のファンに支えられている。したがって，それぞれの地域で，各店舗の売れ筋を調べることで，当該地域の飲酒嗜好をかなりの精度で明らかにすることができる。大分県域に分布する小売酒販店のうち，新興のディスカウントストアやスーパーマーケットを除いた件数をNTTタウンページで検索すると，合計で632件を数えることができた。これを各市町村の世帯数比と店舗数比を勘案して全市町村に割り振った100件の店舗にアンケートを送付し，全店舗（すなわち，大分県の全市町村）を回って，回収時に補足聴き取り調査を行った。その結果，84件の有効回答を得ることができた[4)]。なお，おもなアンケート・聴き取り内容は，①大分県域で嗜好される主要酒類である清酒，単式蒸留のムギ・イモ・コメ焼酎，連続式蒸留しょうちゅうなどの販売量（すなわち，地域内消費量）の割合，②売れ筋銘柄（４位まで），③特定の酒類や銘柄が，その地域で支持されている理由，④近年の飲酒嗜好の変化などである。

ところで，熊本県における調査でも感じたことであるが，酒販小売業の自由化以降，当業界には大きなうねりが生じている。すなわち，低価格を売りにするディスカウントストアやコンビニエンスストアの進出に伴う一般小売業への打撃に始まり，その後，ディスカウントストアも，酒と肴を併売するスーパーマーケットに太刀打ちできずに縮小傾向，コンビニエンスストアも過当競争と経営の厳しさから廃業化が顕著となっている。アンケートを送付させていただいた店舗を回っても店の跡形すらないところも多かった。熊本県域における調査では，店舗リストから飛び込みで開いている店舗を探して回り，入手データ件数のクリアに努めたが，今回の大分県域での調査では，回収できなかった分を飛び込みで回って，その度に廃業を確認するという始末で当初の目標件数をクリアすることはできなかったが，そういった中で可能な限りの調査に努めた[5)]。

2．地域の概観

大分県域に展開する飲酒嗜好地域の分布展開についてふれる前に，大分県域の歴史的側面を含む地域の特徴について解説する。

大分は，九州東部に位置する面積6,339.7km^2，人口1,196,409人（平成22年国勢調査結果）の県である。地勢的には山がちで山地面積が7割超ある。大古の阿蘇火砕流台地と構造性の盆地を貫いて周防灘へ注ぐ山国川，駅館川，西流してやがて有明海へ注ぐ筑後川，別府湾に向かう

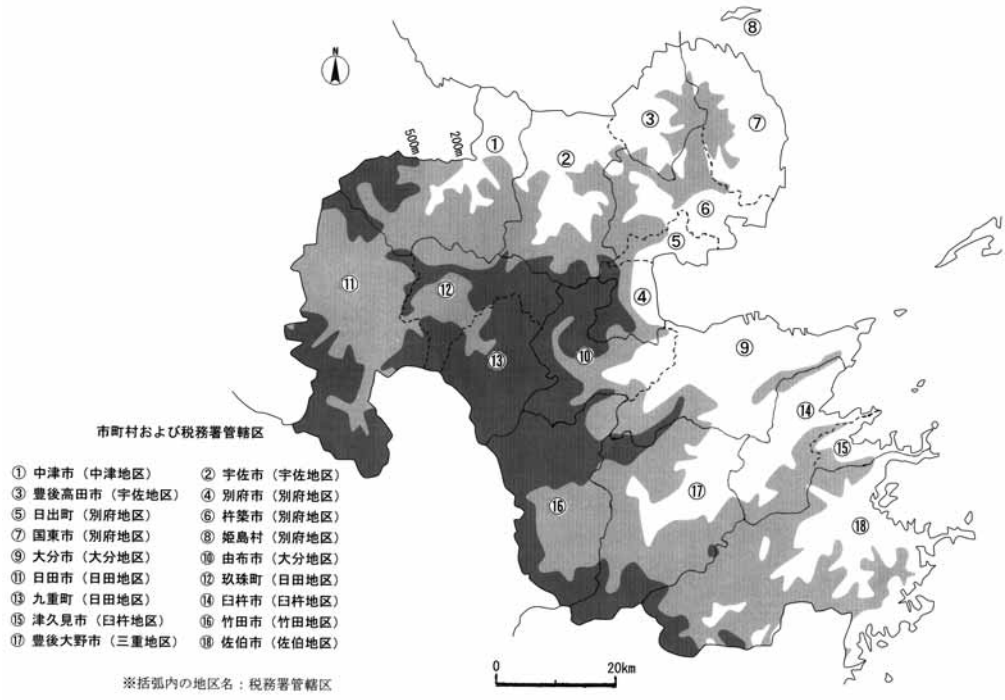
大分川，大野川，豊後水道へ注ぐ臼杵川，番匠川などが侵食谷を刻み，中津，大分平野を形成する。その上に，新たな活動によって形成された両子山，由布・鶴見岳，くじゅう連山などの火山が屹立する[6)]。沿岸に目を転ずると，北の周防灘（豊前海）沿岸は遠浅の水域が続き，干潟が広がる。国東半島では西半部が凹凸の続く小規模なリアス式海岸，東半部が砂浜海岸を成す。さらに平均水深36mと浅い別府湾が続き，佐賀関半島以南は，規模の大きなリアス式海岸を成し，その湾入部に都市，漁村が発達している。

地形的に山川などで小刻みにされた当地の歴史を振り返る。中世九州でも有力な大名であった大友氏の全盛期には，その勢力が豊後，豊前，筑前，筑後，肥前，肥後の６カ国に及んだ。これが滅んだ豊臣秀吉の時代に，小藩に分割されて江戸時代に至り，幕末まで８の藩と天領および，肥後，延岡藩などの飛び地が存在した。近世初期を通じて当地各藩では幾度も転封が繰り返された。それが落ち着いた享保２（1717）年以降の各藩の状況をみると，中津藩（奥平氏10万石），杵築藩（松平氏3.2万石），日出藩（木下氏2.5万石），府内藩（松平氏2.2万石），臼杵藩（稲葉氏５万石），佐伯藩（毛利氏２万石），岡藩（中川氏７万石），森藩（久留島氏1.2万石），旗本時枝領（５千石），同格立石領（５千石），肥後藩飛び地領（２万石），島原藩同（2.7万石），延岡藩同（２万石），および天領日田（７万石）など錯綜した所領地が展開した（渡辺，1971，農山漁村文化協会，1998）。各藩領では，それぞれ独自の経済・文化圏が形成されるのであるが，同時に藩領域を超えての交通・物流路が不可欠であった。たとえば，豊後国南西端の山奥に位置する岡藩の交通路をみると，城下から陸路で熊本城下へ至る「肥後往還」，府内城へ至る「竹田往還」，日田永山政所へ至る「日田往還」，臼杵・佐伯城下へ至る「日向往還」があったが，物流路としては，陸路犬飼に至り，ここから大野川を舟運で下って河口の三佐より海路を利用するルートが重要であった。また，同じく内陸に位置する天領日田は，九州外様大名のおさえとして重要な政治・経済的機能を果たしていたが，物流路として筑後川（日田川）を使う舟運が開かれ，早くから筑前・筑後との交流があった[7)]。

以上見てきたように，近世の小藩分立が，飲酒嗜好に関しても地域独自の文化を育む要因となったと考えられる。

大分県域の地域区分には，いろいろな考え方がある。たとえば，県の振興局の管轄区は，①北部（中津・宇佐・豊後高田市），②西部（日田市，玖珠・九重町），③東部（国東・杵築・別府市，日出町，姫島村），④中部（大分・由布・臼杵・津久見市），⑤豊肥（竹田・豊後大野市），⑥南部（佐伯市）の６地区となっている[8)]。また，『日本の地誌10　九州・沖縄』（野澤・堂前・手塚，2012）では，住民意識として確定されたものとは言いがたいとしながら，①中津・宇佐（中津・宇佐・豊後高田市），②日田・玖珠（日田市，玖珠・九重町），③大分・別府（大分・別府・由布・杵築・国東市，日出町，姫島村），④竹田（竹田市），⑤南豊後（臼杵・津久見・佐伯市）に分けている。

本稿では，地域別の解説に当たって酒類の製造・販売を統括し，統計等の最小単位となっている税務署管轄区を採用する。大分県下の税務署管轄区は，①中津（中津市），②宇佐（宇佐・豊後高田市），③別府（別府市，日出町，杵築市，国東市，姫島村），④大分（大分・由布市），⑤日田（日田市，玖珠・九重町），⑥臼杵（臼杵・津久見市），⑦竹田（竹田市），⑧三重（豊後大野市），⑨佐伯（佐伯市）となっている[9)]（第２図）。



第２図　市町村および税務署管轄区の位置

３．大分県域における飲酒嗜好の地域的展開

本章ではまず，大分県で嗜好されるおもな酒類のうち，地域的特性の見出しにくいビール系酒類を除く清酒，単式蒸留しょうちゅう，連続式蒸留しょうちゅうに関する飲酒嗜好の展開について概観する。その上で，地域ごとの飲酒嗜好にみられる特性とその変容についてみていく。

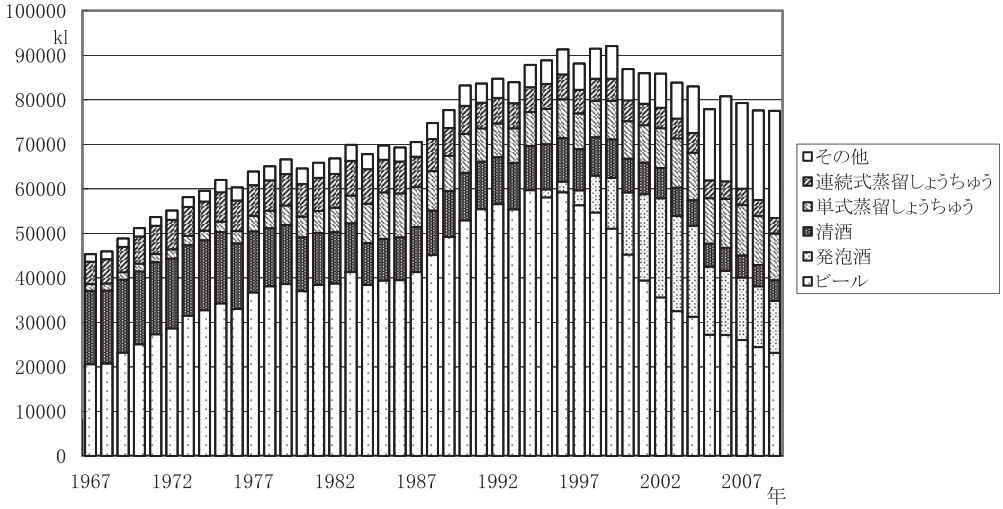
第３図は，『熊本国税局統計書』他による大分県における酒類別消費量の推移を示している。また，第４図および第１表は，大分県内84件の小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査で得られた市町村ごとの酒類別消費割合を示している。これらをもとに，以下分析を進める。

１）酒類ごとの飲酒嗜好にみる特性

a）清酒

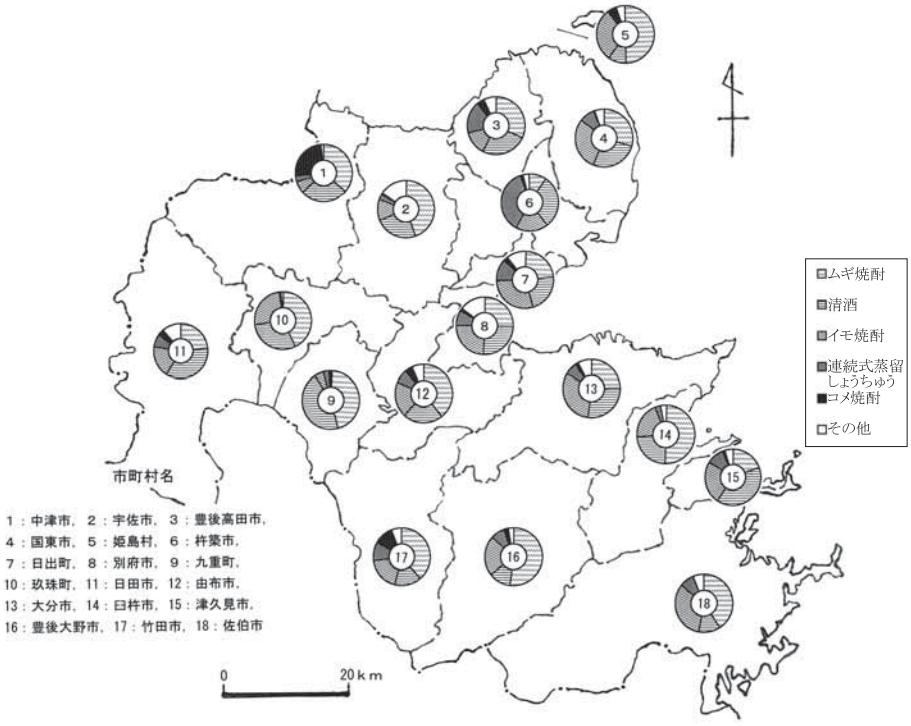
大分県は，もともと大部分の地域が清酒文化圏に属しており，その消費量が圧倒的に多かった。国税局の統計中では，最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合36.4％）であったが，その後急減し2009（平成21）年にはこれが6.0％に減じた（第３図）。

小売酒販店に対するアンケート調査より，現在でも清酒消費の多い（酒類別比30％以上の）市町村をみると，多い順に九重町，津久見市，日田市，玖珠町，杵築市となっている。これらはいずれも県内でも有数かつ老舗の清酒メーカーの所在地，もしくはその近隣市町村である（第４図，第１表）。



第３図　大分県における酒類別消費量の推移

『熊本国税局統計書』による。



第４図　市町村別酒類嗜好の展開

資料：小売酒販店に対する聴き取りアンケートによる。

第１表　大分県市町村別主要酒類消費割合

単位：％

	市町村名	ムギ焼酎	清　酒	イモ焼酎	コメ焼酎	連続式	その他
1	中津市	36.1	27.3	6.5	25.2	3.3	1.6
2	宇佐市	44.0	24.4	11.9	0.8	2.9	15.9
3	豊後高田市	31.7	25.7	13.3	4.0	18.0	7.3
4	国東市	29.5	26.5	29.5	0.5	8.5	5.5
5	姫島村	50.0	10.0	30.0	5.0	0.0	5.0
6	杵築市	10.0	30.0	18.3	1.7	36.7	3.3
7	日出町	22.8	22.1	29.0	2.5	12.5	11.3
8	別府市	25.2	25.4	24.5	1.6	8.4	14.9
9	九重町	45.0	45.0	5.0	2.0	3.0	0.0
10	玖珠町	42.5	30.0	25.0	0.0	1.0	1.5
11	日田市	23.2	35.5	18.7	3.8	7.3	11.3
12	由布市	39.3	22.5	20.0	3.8	7.5	7.0
13	大分市	24.4	27.5	31.6	1.7	7.0	7.8
14	臼杵市	50.0	23.3	20.0	0.0	3.4	3.3
15	津久見市	19.4	40.0	24.9	1.5	9.7	5.0
16	豊後大野市	51.8	12.5	22.3	2.5	7.5	3.4
17	竹田市	38.8	15.5	18.7	10.5	10.7	5.8
18	佐伯市	40.9	12.2	32.7	0.4	7.7	6.0
	平　均	34.7	25.3	21.2	3.8	8.6	6.4

資料：小売酒販店84件への聴き取りアンケート。

県内で好まれる主要銘柄をみてみよう（第２表）。アンケートで各店舗の売れ筋銘柄４位までを答えていただいた。表中の得点は，それぞれの店舗での１位を４点，２位を３点，３位を２点，４位を１点として点数化して合算したものである。これをみると，今日では国東の「西の関」が圧倒的であり，地元国東で最も愛飲されている他，売れ筋４位までに全18市町村中の14市町村で出てきた。次いで九重の老舗「八鹿」（同７市町）が広域で好まれるが，日田の「老松」（同１市），「薫長」（同３市），竹田の「千羽鶴」（同１市）などは，地元で根強く支持されていることがわかる。また，豊後大野の「鷹来屋」は，大分・別府といった都市部で評価が高く，中央メーカー製の「月桂冠」，「松竹梅」も，都市部に消費中心がある。

第２表　大分県内で嗜好される清酒の主要銘柄

銘　柄	得点*1	銘柄酒蔵（本社）所在地
西の関	84	萱島酒造　（国東市）
八鹿	30	八鹿酒造　（九重町）
老松	17	老松酒造　（日田市）
薫長	11	クンチョウ酒造（日田市）
千羽鶴	11	佐藤酒造　（竹田市）
月桂冠	11	月桂冠　（京都市）
鷹来屋	10	浜嶋酒造　（豊後大野市）
松竹梅	10	宝酒造　（京都市）
久保田	7	朝日酒造　（新潟県長岡市）
和香牡丹	6	三和酒類　（宇佐市）
一乃井手	6	久家本店　（臼杵市）
亀の井	5	亀の井酒造　（玖珠町）
丹誠	4	丹誠酒類　（豊後大野市）
角の井	3	井上酒造　（日田市）
金鷹	1	浜嶋酒造　（豊後大野市）
豊後自慢鬼ころし	1	藤居酒造　（臼杵市）
大関	1	大関　（兵庫県西宮市）
八海山	1	八海醸造　（新潟県魚沼市）

資料：大分県内小売酒販店84店舗に対する聴き取りアンケートデータ。

*1 売れ筋銘柄のうち，各店舗１位銘柄を４点，２位を３点，３位を２点，３位を１点として合算した総得点。

ｂ）単式蒸留しょうちゅう

第３図をみると，単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合がわずか3.4％であった。その後漸増して1985（昭和60）年にピーク（同15.0％）を迎える。その後漸減に転じたが，2000年以降漸増して今日に至っている。

かつては清酒蔵が作る粕取り焼酎の他，県境に位置する日田・中津に一部他県からの流入焼酎，また，竹田・佐伯に雑穀や一部コメなどを原料とする焼酎の消費がみとめられたものの，県全体として消費量は少なかった。また，かつては，他の九州焼酎圏と同じく25°焼酎の消費が多かったという話も聞かれた[10)]。

その後，南九州から福岡，さらに全国市場に至る数度にわたる焼酎ブームの刺激を受けて1974（昭和49）年に日出の二階堂酒造が，一次仕込みからムギを使うムギ焼酎の製造販売を開始したことで様相が一変する。当初，販売上の苦労もあったと聞くが，徐々に製造・販売を拡大してブームへの流れを作ると，1980年頃より県内主要清酒酒蔵がこぞってムギ焼酎生産に乗り出し，これが一気に県民酒へと成長することとなった。第３図をみても，85年当時がムギ焼酎嗜好の一つのピークとなっていることがわかる。ちなみに現在は，県内で消費される焼酎の大半が20°となっている。また，2000年以降，全国的な宮崎・鹿児島県産イモ焼酎ブームが，大分県にも波及し，特に都市部を中心に消費が大きく伸びている。なお，全国的なブームに乗って，大分県の一部酒造業者でも近年，イモ焼酎を手がけるところが出てきている。

第４図，第１表より，現在，ムギ焼酎の消費が多い（酒類別比40％以上の）市町村をみると，

多い順に豊後大野市，臼杵市，姫島村，九重町，宇佐市，玖珠町，佐伯市となっている。清酒どころとの重複がみられるのは，各地の主要清酒蔵が，現在では並行して主要ムギ焼酎蔵となっているためである。また，2000年以降大分県域でも消費が大幅に伸びたイモ焼酎の消費が多い（酒類別比30％以上の）市町村は，佐伯市，大分市，姫島村である。佐伯市は，焼酎生産・消費の多い宮崎県に北接しており，ブーム以前から焼酎の生産・消費の多いところであったが，一般的にはブームに敏感な都市部での消費が多いと言えよう。コメ焼酎の消費が多い（酒類別比10％以上）のは，中津市，竹田市である。中津で生産されるコメ焼酎「耶馬美人」は，旧山国・耶馬溪・本耶馬渓町（現中津市）の酒販店で主力商品となっている。地元消費も多いが，現在はプレミアがついて人気があり，福岡県からわざわざ買いに訪れる常連客も多いとのことであった。また，竹田を含む九州山地一帯は，南の球磨地方から続くコメ・雑穀焼酎消費圏に含まれている。

第３表　大分県内で嗜好される単式蒸留しょうちゅうの主要銘柄

銘柄	得点*1	売れ筋の酒類	酒蔵（本社）所在地
二階堂	190	20°　ムギ	二階堂酒造（日出町）
黒霧	171	20°　イモ	霧島酒造　（宮崎県都城市）
いいちこ	59	20°　ムギ	三和酒類　（宇佐市）
なしか	26	20°　ムギ	八鹿酒造　（九重町）
田五作	15	25°　ムギ	老松酒造　（日田市）
耶馬美人	12	25°　コメ	旭酒造　（中津市）
常蔵	11	20°　ムギ	久家本店　（臼杵市）
西の星	11	20°　ムギ	三和酒類　（宇佐市）
とっぱい	10	20°　ムギ	南酒造　（国東市）
泰明	6	20°　ムギ	藤居醸造　（豊後大野市）
清明	5	20°　ムギ	萱島酒類　（竹田市）
白波	5	25°　イモ	薩摩酒造　（鹿児島県枕崎市）
佐藤	4	25°　イモ	佐藤酒造　（鹿児島県霧島市）
白岳しろ	4	25°　コメ	高橋酒造　（熊本県人吉市）
富乃宝山	4	25°　イモ	西酒造　（鹿児島県日置市）
喜納屋	3	20°　ムギ	南酒造　（国東市）
黒島	3	25°　ムギ	久家本店　（臼杵市）
ほげほっぽ	3	25°　ムギ	久家本店　（臼杵市）
ごりょんさん	3	20°　ムギ	鷹正宗　（福岡県久留米市）
為ゝ	2	25°　ムギ	常徳屋　（宇佐市）
白寿	2	20°　ムギ	古手川酒造（臼杵市）
喜界島	2	25°　黒糖	喜界島酒造（鹿児島県喜界町）
天孫降臨	2	20°　イモ	神楽酒造　（宮崎県高千穂町）
佐伯小町	1	20°　ムギ	ぶんご銘醸（佐伯市）
ぶんご太郎	1	20°　ムギ	ぶんご銘醸（佐伯市）
日向木挽	1	20°　イモ	雲海酒造　（宮崎県宮崎市）
海	1	25°　イモ	大海酒造　（鹿児島県鹿屋市）
黒瀬	1	25°　イモ	鹿児島酒造（鹿児島県阿久根市）

資料：大分県内小売酒販店84店舗に対する聴き取りアンケートデータ。

*1 売れ筋銘柄のうち，各店舗１位銘柄を４点，２位を３点，３位を２点，３位を１点として合算した総得点。

県内で好まれる単式蒸留しょうちゅうの銘柄をみてみよう（第３表）。これをみると，県内消費における「二階堂」の強さが際立っており，18市町村中10市町村で売れ筋得点が１位，さらに４位までに15市町村が出てくる。地元酒が好まれる一部地域を除いて県のほぼ全域で好まれており，まさに大分ムギ焼酎の代表銘柄となっている。これに次ぐのが「黒霧」であり，３市で売れ筋得点１位，４位までに15市町村が出てくる。国内有数の焼酎メーカーに成長した三和酒類（宇佐市）の「いいちこ」であるが，大分県内では，先の２ブランドに後れをとっている。それでも売れ筋の４位までに13市町村が出てくる。

全県域で好まれているこれら３銘柄の他，地域的に好まれているものとして日田圏６市町村で好まれる「なしか」，日田市，大分市で好まれる「田五作」，先述した耶馬地方の「耶馬美人」，地元臼杵の他，大分・別府市で好まれる「常蔵」，地元宇佐・豊後高田市で好まれる「西の星」，地元国東，別府市で好まれる「とっぱい」などが主要なところとなっている。

ｃ）連続式蒸留しょうちゅう

1910（明治43）年，わが国では連続式蒸留しょうちゅうの生産・販売が始まり[11)]，大正期には一大生産ブームが生じた。大分県にもこの頃から連続式蒸留しょうちゅうの消費が拡大し，戦中戦後を通じて，安価，無味無臭で飲みやすいなどの理由で著しく消費が伸びている。国税局の統計が残る1967（昭和42）年時点でも，県全体で単式蒸留しょうちゅうの３倍強の消費量（全酒類消費に占める割合11.1％）があった。ただし，減少率でみると清酒ほどではないが，愛飲者の高齢化に伴い連続式蒸留しょうちゅうも消費の減少が顕著であり，2009（平成21）年現在の同消費割合が4.5％となった（第３図）。

現在でも連続式蒸留しょうちゅうの消費が多い（酒類別比10％以上の）市町村をみると，多い順に杵築市，豊後高田市，日出町，竹田市となっており，県の縁辺部，特に国東地方で愛飲されていることがわかる（第４図，第１表）。

県内で好まれる連続式蒸留しょうちゅうの銘柄をみてみよう（第４表）。これをみると，「三楽」の強さが際立っていることがわかる。杵築市で売れ筋得点１位の他，４位までに11市町村が出てくる。この他「ダイヤ」（同４市町村），「宝」（同３市）が出てくる。なお，各店舗への聴き取りにより，連続式蒸留しょうちゅうは，かつて明白な銘柄別の消費圏がみとめられたことがわかっている。すなわち，日田・玖珠地方で「ダイヤ」（もともと熊本市の工場より搬入），大分市の東西縁部で「ダルマ」（広島県廿日市市），佐賀関で「宝」の消費が卓越し，それ以外の全域で「三楽」（もともと八代市の工場より搬入）が愛飲されていた。

第４表　大分県内で嗜好される連続式蒸留しょうちゅうの主要銘柄

銘柄	得点*1	酒蔵（本社）所在地
三楽	38	メルシャン　（東京都）
ダイヤ	8	アサヒビール（東京都）
宝	8	宝酒造　　（京都市）
大五郎	4	アサヒビール（東京都）

資料：大分県内小売酒販店84店舗に対する聴き取りアンケートデータ。

*1 売れ筋銘柄のうち，各店舗１位銘柄を４点，２位を３点，３位を２点，４位を１点として合算した総得点。

2）地域ごとにみた飲酒嗜好の展開

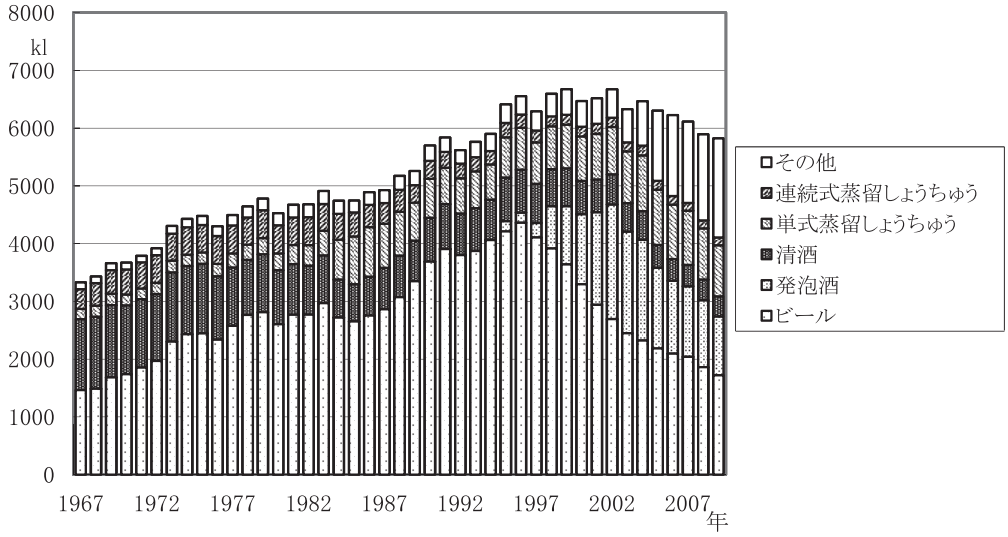
ここでは，先にあげた９税務署管轄区ごとに飲酒嗜好の展開をみていく。

a）中津地区

中津市は，人口84,000余人（平成22年国勢調査），福岡県境に位置し，山国川流域の旧山国・耶馬溪・本耶馬渓町，三光村と2005年に合併して現在の市域となった。

『熊本県国税局統計書』より当地区における酒類別消費量を示した第５図をみると，ビール類以外でかつて最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合36.9％）であったが，2009（平成21）年にはこれが5.9％に減じた。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1972（昭和47）年がピーク（同12.3％）であったが，これも一貫して減少し，2009（平成21）年にはわずか2.3％となった。これらに対し，単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合が5.4％と低い。ただし，県内税務署管轄区９地区中では４位と当初から比較的高かった。この理由として，隣県である福岡県からの焼酎の流入や地元コメ焼酎の存在があげられる。その後，増加に転ずるが割合的にピークは1986（昭和61）年の17.6％であり，その後一旦減少した後，2000年以降の焼酎ブームの影響から増加して今日に至っている。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の中津管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中の36.1％），次いで清酒（同27.3％），コメ焼酎（同25.2％）が続き，イモ焼酎（同6.5％），連続式蒸留しょうちゅう（同3.3％）は少ない。当地区でコメ焼酎のシェアが大きいのは，先述のように福岡からの常連客も買いに出向くという特殊な事情があった。



第５図　中津地区酒類別消費量の推移

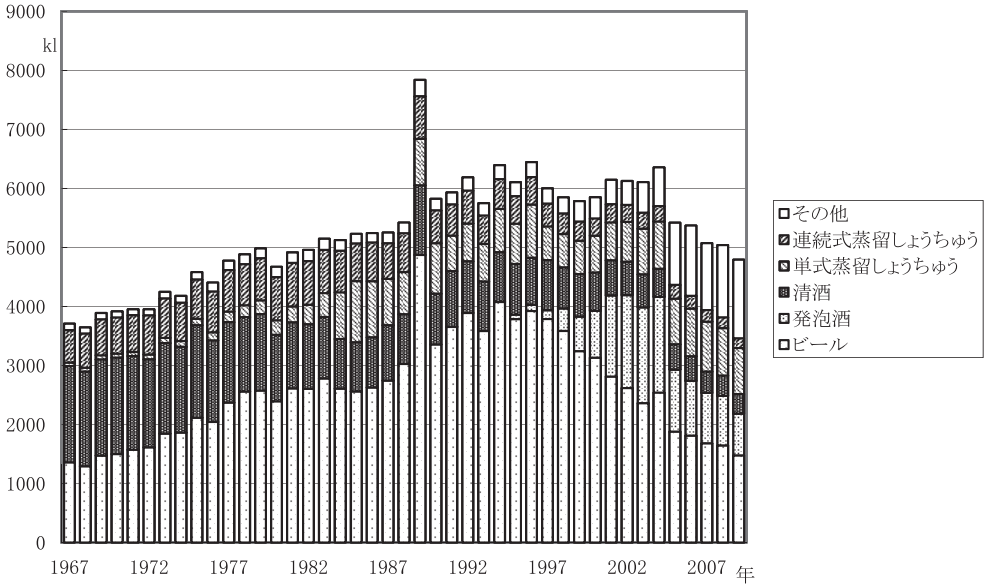
『熊本国税局統計書』他による。

b）宇佐地区

宇佐市，豊後高田市が含まれる当地区は，人口83,000人弱（平成22年国勢調査），八幡宮の総本山である宇佐神宮や2005（平成17）年に合併したグリーンツーリズムで知られる安心院，ユニークな町おこし「昭和の町」や神と仏の山「六郷満山」で知られる豊後高田市などがある。

当地区で，最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合44.0％）であり，当時はビールよりも消費量が多かったが，2009（平成21）年には6.9％に減じた。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1972（昭和47）年がピーク（同16.8％）であったが，これも一貫して減少し，2009（平成21）年には3.4％となった。これらに対し，単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合がわずか1.6％であった。その後漸増して1985（昭和60）年にピーク（同19.8％）を迎える。しかし，その後減少に転じたが，2000年以降漸増して今日に至っている（第６図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の宇佐管内をみると，現在最も好まれているのが宇佐・豊後高田市ともにムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中２市平均で37.9％），次いで清酒（同25.1％），イモ焼酎（同12.6％）が続く。これに対し，連続式蒸留しょうちゅう（宇佐市2.9％，豊後高田市18.0％）は，同管内に含まれる２地区で際だった相違をみせ，連続式蒸留しょうちゅうが強い国東地方の特徴がよく現れている。



第６図　宇佐地区酒類別消費量の推移

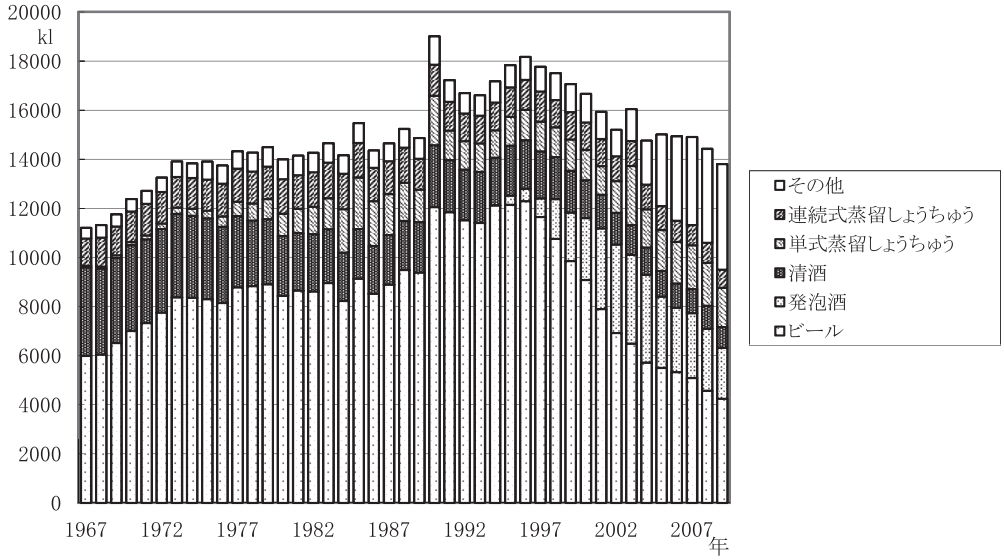
『熊本国税局統計書』他による。

c）別府地区

当地区は，人口220,000人弱（平成22年国勢調査）を抱える大分地区に次ぐ人口集中地区である。国東半島とその付け根，別府湾沿岸地区には，国際的温泉観光都市である別府市，坂道の城下町として知られる杵築市，「六郷満山」中４郷が含まれる神と仏の町国東市，木下氏の城下町，城下ガレイ，そして二階堂酒造で知られる日出町，キツネ踊りとクルマエビ，そしてジオパーク[12]登録へと進む姫島村が含まれる。

当地区で，ビール類以外で最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合32.1％）であったが，2009（平成21）年には6.1％に減じた。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1968（昭和43）年がピーク（同10.4％）であったが，これも一貫して減少し，2009（平成21）年には5.3％となった。これらに対し，単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合がわずか0.7％であった。その後1980年代半ばまで漸増した後減少に転じるが，2000年以降の焼酎ブームに乗って再び増加し2003（平成15）年にピーク（同19.8％）を迎えている（第７図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の別府管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中５市町村平均で27.5％），次いでイモ焼酎（同26.3％），清酒（同22.8％），連続式蒸留しょうちゅう（同13.2％）と続く。これらの中でも別府市は，多様な消費嗜好のみられる典型的な都市型を示す。一方で，杵築市は，特に清酒と連続式蒸留しょうちゅうに強く，伝統的な飲酒嗜好が残存している地と言えよう。



第７図　別府地区酒類別消費量の推移

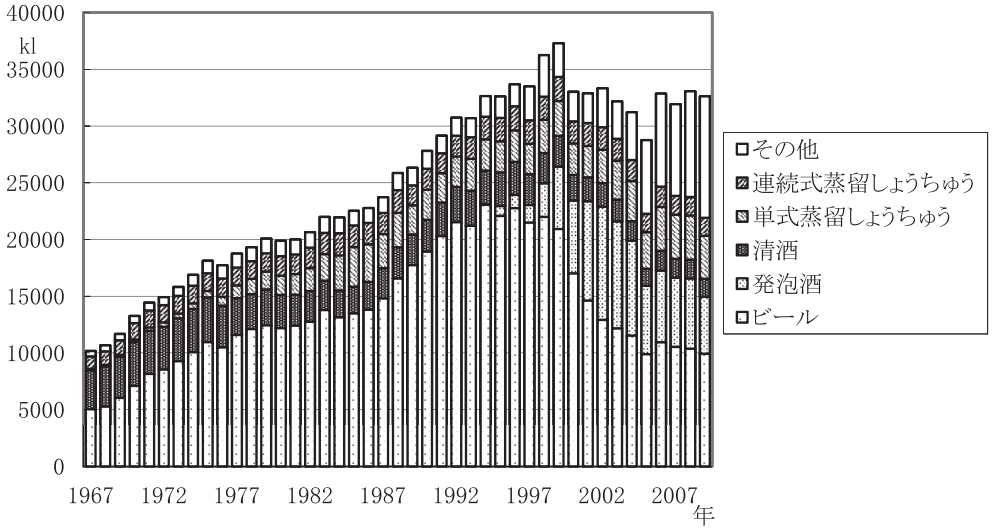
『熊本国税局統計書』他による。

d）大分地区

当地区は，人口509,000人弱（平成22年国勢調査），県人口の42.5％を抱える中心地区である。県都で文字通り政治・経済の中心である大分市，温泉観光地として人気の高い湯布院のある由布市が含まれる。

当地区で，ビール類以外で最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合34.0％）であったが，2009（平成21）年には4.9％に減じた。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1968（昭和43）年がピーク（同11.3％）であったが，これも一貫して減少し，2009（平成21）年には4.9％となった。これらに対し，単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合がわずか1.2％であった。その後漸増し1985年にピーク（同15.5％）を迎える。しかしその後減少に転じ，2000年以降の焼酎ブームで回復傾向にある（第８図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の大分管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中２市平均で31.9％），次いでイモ焼酎（同25.8％），清酒（同25.0％）と続き，連続式蒸留しょうちゅう（同7.3％），コメ焼酎（同2.8％）は低い。特にこの地区は，先述の別府市と並ぶ都市型消費嗜好のみられる地区となっている。



第８図　大分地区酒類別消費量の推移

『熊本国税局統計書』他による。

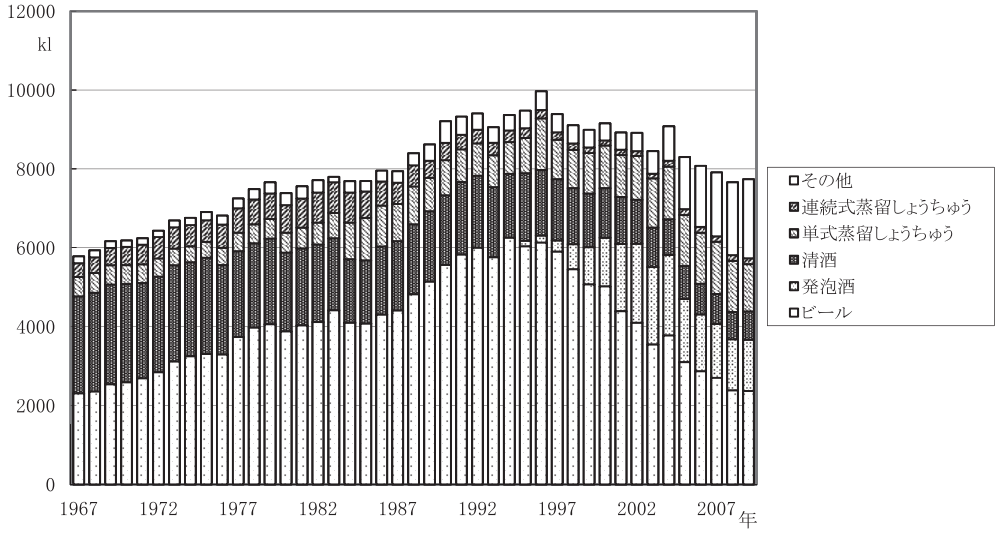
e）日田地区

当地区は，人口98,500人弱（平成22年国勢調査），豆田など天領としての歴史的町並みと三隈川の注ぐ水郷，日田スギなどで知られる日田市，童話の里として知られる玖珠町，八鹿酒造のある九重町が含まれる。

当地区で，最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合42.5%）であり，当時はビールよりも消費量が多かったが，その後急減して2009（平成21）年には9.2%となった。ただ，この数値は，大分県内のどの地区よりも高く，今日でも清酒嗜好が根強く残っていることがわかる。清酒に次いで当初消費の多かったのは，他地区と違い単式蒸留しょうちゅうであり，1967（昭和42）年当時で，8.6%もあった。この数値は，県境で同じく他地区からの影響を受けていた佐伯に次ぐ数値である。当時は労働者の酒として粕取り焼酎が好まれた他，福岡，鹿児島，宮崎など他県からの転勤者の流入があり，彼らの地元焼酎を注文販売することもあった[13)]。これの消費はしかし，その後漸減するが，1975（昭和50）年以降地元のムギ焼酎の勃興があって増加，1985（昭和60）年以降漸減するも焼酎ブーム下2000年以降再度増加に転じ，2008（平成20）年に17.0%とピークを迎えている。連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1983（昭和58）年がピーク（同9.9%）であったが，これも一貫して減少し，2009（平成21）年にはわずか1.9%となった（第９図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の日田管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中３市町平均で36.9%）であり，特に玖珠・九重町で強い。これに並んで清酒（同36.8%），イモ焼酎（同16.2%）が続き，連続式蒸留しょうちゅう（同3.8%）は低い。

当地区は，伝統的に福岡文化圏とのつながりが色濃く，そのことは，魚介料理に関しても[14)]飲酒嗜好に関しても言えることであった。焼酎は，ムギ焼酎ブーム以降大分県のほぼ全域を通



第９図　日田地区酒類別消費量の推移

『熊本国税局統計書』他による。

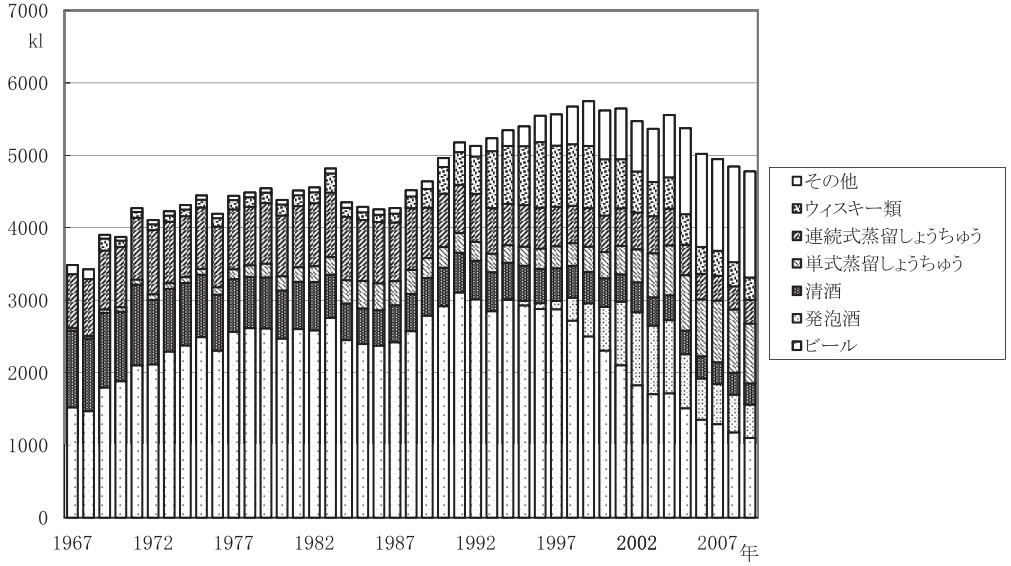
じて価格が安いこともあって，度数20°が好まれてきた。ところが，日田地区では福岡・熊本方面から焼酎が搬入されたこともあって，今日でも25°が好まれている。また，先述のように連続式蒸留しょうちゅうの銘柄も，県全域で一般に好まれてきた「三楽」ではなく，「ダイヤ」が主流であったことも，当地区の飲酒嗜好に関する独自性を示している。

ｆ）臼杵地区

当地区は，人口61,000人強（平成22年国勢調査），国宝の磨崖仏や城下町の町並み，酒，味噌，醤油など醸造で知られる臼杵市，セメント工業や保戸島のマグロ漁業で知られる津久見市が含まれる。

当地区で，最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合30.4％）であり，その後急減して2009（平成21）年には6.1％となった。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1968（昭和43）年がピーク（同23.0％）であったが，これも一貫して減少し，2009（平成21）年には6.9％となった。これらに対し，単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合がわずか1.0％であった。その後漸増し2000年以降の焼酎ブームを経て2008（平成20）年にピーク（同18.0％）を記録している。臼杵地区の統計をみると，他地区との明瞭な違いとして，ウィスキーの割合が非常に高く，1996（平成８）年には，全酒類比の16.3％をも占めていることである。ちなみにこれは，通販系の大手小売店が当地区にあることによる特殊なケースと言える（第10図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の臼杵管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中２市平均で34.7％）であり，これは特に臼杵市で強い。これに並んで清酒（同31.7％），イモ焼酎（同22.5％）が続



第10図　臼杵地区酒類別消費量の推移

『熊本国税局統計書』他による。

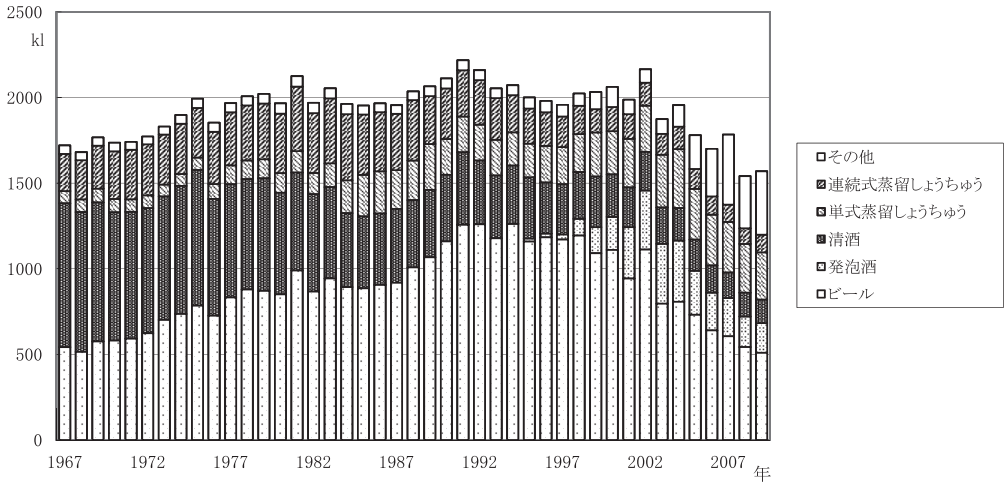
き，連続式蒸留しょうちゅう（同6.6%）は低い。

g）竹田地区

当地区は，人口24,000人強（平成22年国勢調査），くじゅう連山や阿蘇の山々に囲まれた盆地中の岡藩城下町で知られる竹田市が含まれる。

当地区で，最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合48.8%）であり，当時はビールの消費量よりも多かった。その後急減して2009（平成21）年には8.7%となった。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1984（昭和59）年がピーク（同19.7%）であったが，これもその後減少し，2009（平成21）年には6.6%となった。単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合が4.2%であった。その後漸増し1986（昭和61）年を境に減少，2000年以降の焼酎ブームを経て2008（平成20）年にピーク（同18.5%）を記録している（第11図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の竹田管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中の38.8%）である。これ以外は，量的には少なく，イモ焼酎（同18.7%），清酒（同15.5%），連続式蒸留しょうちゅう（同10.7%）と続く。特筆すべきなのは，これらに次いでコメ焼酎（同10.5%）の消費量が多いことである。このことから，球磨焼酎に代表される九州山地縁辺のコメ焼酎嗜好が当地にも及んでいることがわかる。



第11図　竹田地区酒類別消費量の推移

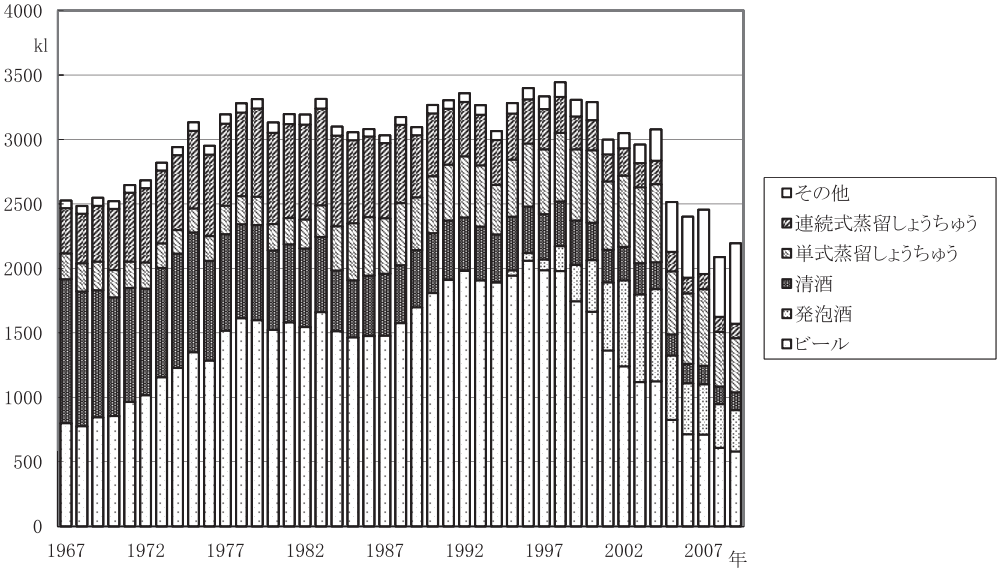
『熊本国税局統計書』他による。

h）三重地区

当地区は，人口39,500人弱（平成22年国勢調査），ここも複雑な地形・地質と滝，石橋などの資源をもとにジオパーク認定を目指す[15)]，南の九州山地へと続く内陸中山間地である豊後大野市が含まれる。

当地区で，最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合44.2%）であり，その後急減して2009（平成21）年には6.3%となった。清酒に次いで消費の多かった連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1982（昭和57）年がピーク（同23.1%）であったが，これもその後減少し，2009（平成21）年には5.2%となった。単式蒸留しょうちゅうは，1967（昭和42）年当時の消費割合が7.8%ある。この数値は，地区別では佐伯，日田に続く第３位であり，昔から県南宮崎県境地域と県西福岡・熊本県境地域では，隣接県の影響を受けて単式蒸留しょうちゅうが好まれてきたことがわかる。その後，消費量的には横ばいが続いたが，1984（昭和59）年に急増し，その後も増加を続けて2007（平成19）年にピーク（同24.2%）を迎えた（第12図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の三重管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中の51.8%）である。これに続くのがイモ焼酎（同22.3%），清酒（同12.5%），連続式蒸留しょうちゅう（同7.5%）となっている。



第12図　三重地区酒類別消費量の推移

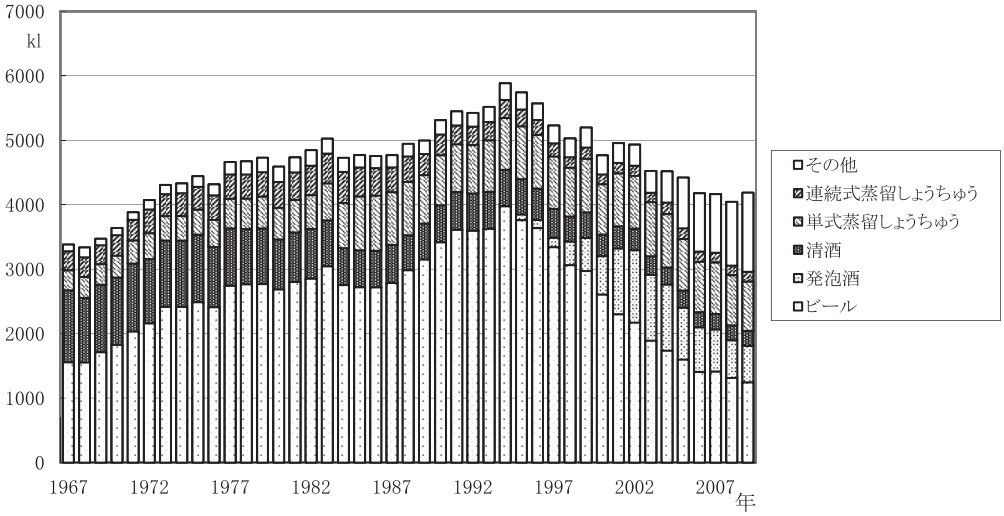
『熊本国税局統計書』他による。

ｉ）佐伯地区

当地区は，人口77,000人弱（平成22年国勢調査），かつて「佐伯の殿様浦でもつ」とうたわれた水産都市，佐伯市が含まれる。

当地区で，最も好まれていた清酒は，割合的には統計上最も古い1967（昭和42）年が最高（全酒類消費に占める割合33.1％）であり，当時はビールの消費量よりも多かった。その後急減して2009（平成21）年には5.6％となった。清酒に次いで消費の多かったのは，他地区と違い単式蒸留しょうちゅうであり，1967（昭和42）年当時で消費割合が9.1％もあった。この数値は，9地区中の第１位である。当地区は，九州山地一帯の雑穀・コメ焼酎圏の北縁に当たり，古く江戸時代から続く雑穀を原料とする焼酎蔵が数軒あり，当初から単式蒸留しょうちゅうが好まれてきた。その後，消費量は横ばいから徐々に増えるが，1986（昭和61）年を境に漸減し，2000年以降焼酎ブームに乗って増加して2008（平成20）年に再びピーク（同19.2％）を迎えた。連続式蒸留しょうちゅうは，割合的には1984（昭和59）年がピークの10.3％あったが，単式に食われる形で数値的には低かった。これもその後減少し，2009（平成21）年には3.7％となった（第13図）。

地域的飲酒嗜好に関する酒販店へのアンケート結果についてふれる。第４図中の佐伯管内をみると，現在最も好まれているのがムギ焼酎（ビール類を除く酒類消費中の40.9％）である。これに続くのがイモ焼酎（同32.7％）であり，清酒（同12.2％），連続式蒸留しょうちゅう（同7.7％）は少なくなっている。



第13図　佐伯地区酒類別消費量の推移

『熊本国税局統計書』他による。

4．飲酒嗜好の形成過程と飲酒嗜好地域の展開に関する考察

前章では，大分県域での飲酒嗜好に，時代によるダイナミックな変容と，その結果としての明瞭な地域差がみとめられることを明らかにした。そのような地域差が，どのようにして生じてきたのか，本章では飲酒嗜好地域の形成過程を示した第14図をもとに，以下その点の考察を進めていく。さらに，大分県域において今日みとめられる飲酒嗜好地域の展開について明らかにする。

1）飲酒嗜好地域の形成過程

江戸時代やそれ以前，現在の大分県域にあたる豊後・豊前国の酒造に関する文献等は，幻の伝統酒「練貫酒」や「麻地酒」に関するものがある（加藤，1957a, 1957b）が，今日の酒造業に直接関連する草創期の業界状況を記したものは，筆者の管見の限りではみとめられなかった。そこでここではまず，大分県内で現在操業している酒造業社のwebページ等より，各業者の創業期についてみてみる。

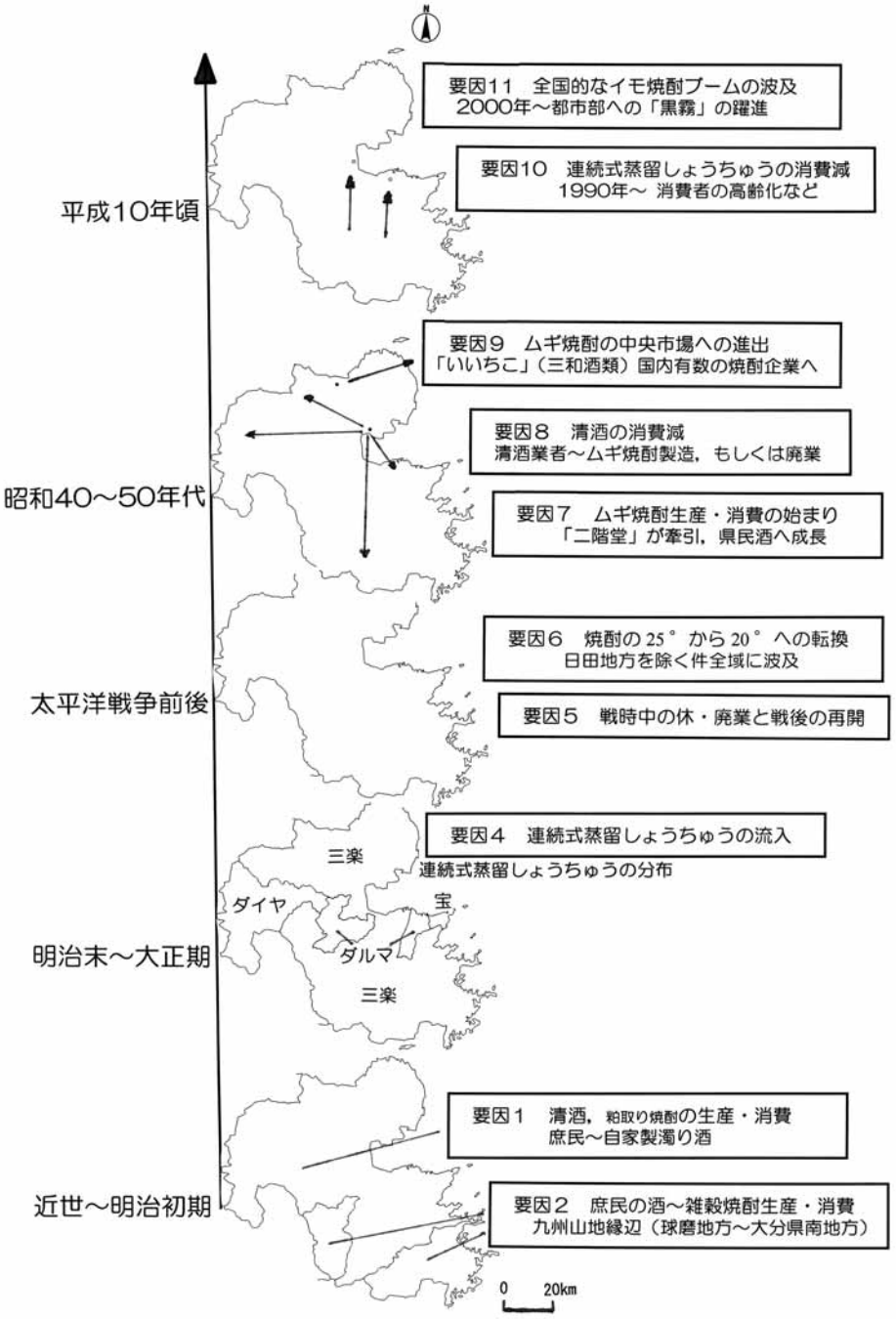
江戸・明治期　現存する酒造企業のうち，webページ等で社史をたどることができた35社の創業年をみると，江戸時代創業の記録があるものが12ある。中で最も古いのが宇佐市安心院にある酒蔵の正徳２（1712）年となっている。この他，1700年代に４，1800年代に７つの酒蔵が創業している。ついで明治期に15，大正期に３，昭和期創業が４となっている。酒蔵の数自体は，往時からは激減しているが[16]，現存する酒蔵は，いずれも歴史の古い老舗が多く，企業協業・合併などによる新設が昭和期以降若干みられる。ちなみに，35社中の大半が清酒（日本酒）蔵からスタートしており，最初から焼酎蔵であったのは，佐伯の１業者のみであった[17]。このことから，初期の現大分県域における飲酒嗜好は，県域の大半が清酒と，量的には少ないものの酒粕を原料として清酒蔵で作られる単式蒸留しょうちゅう（粕取り焼酎）消費圏であり（**飲酒嗜好地域形成要因１**），この他県南の竹田から佐伯にかけての九州山地北縁に，雑穀焼酎消費がみとめられた（**飲酒嗜好地域形成要因２**）。

こういった酒蔵製の酒・焼酎の他，明治の中頃までは庶民の酒として自家製酒（どぶろく）が容認されていた。1898（明治31）年に，国が税収の増加を目的として，これの製造を禁止するに至り，酒造企業の成長が促されることとなる（**飲酒嗜好地域形成要因３**）。ちなみに，webページで創業年の判明した先述の35社のうち，この1898年から太平洋戦争前にかけて創業したものが11社ある。

大正期　1910（明治43）年にわが国に導入された連続式蒸留器を使った新式焼酎（連続式蒸留しょうちゅう）が，大正から昭和初期にかけて一大ブームを巻き起こす。大分県域にも福岡，熊本，広島など多方面の製造場から連続式蒸留しょうちゅうが流入し，消費が拡大した（**飲酒嗜好地域形成要因４**）。

太平洋戦争中・戦後再興期　戦時中の1943（昭和18）年には，統制経済下で酒造業者も自由な操業ができなくなった。また，原料や労働力の確保もむずかしくなったため，休・廃業を余儀なくされる企業が多かった。その後，1949（昭和24）年には酒類の配給制が廃止され，酒造業界も再興期を迎えた（**飲酒嗜好地域形成要因５**）。

戦後の混乱期には，復員者の引き揚げなどに起因する酒類需要の増加に対し，生産が追いつかない事態が発生した。それに対し当県業界では，宮崎県と同様に焼酎の度数を既存の25°から



第14図　大分県域における飲酒嗜好地域の形成過程

20°に下げることで増量を図るとともに，税法上安価に販売する方策を取った[18)]。ただし，もともと福岡消費圏に属していた日田地方には，25°焼酎嗜好が残った（飲酒嗜好地域形成要因６）。

昭和40年代末～50年代　この頃になると，生産・消費の中心であった清酒業に陰りが見え始める。全国的に，いわゆる‘清酒離れ’が始まる時期であるが，大分県では，中央メーカーの清酒の流入も地元業者の経営に大きな圧迫を加えた。そういった苦境への対応の一つとして，昭和40年代の終わり頃，大分ムギ焼酎「二階堂」が発売，後，大ヒットすると，他の清酒業者もこれに追随し，県民酒が清酒からムギ焼酎に取って代わることとなった（飲酒嗜好地域形成要因７）。言い換えると，この時期に清酒の消費減に伴い，その製造業者は廃業するか，もしくはムギ焼酎製造に打って出るかの二者択一を迫られた（飲酒嗜好地域形成要因８）。

「二階堂」に５年ほど遅れてムギ焼酎生産に乗り出した宇佐の「三和酒類」は，「いいちこ」ブランドで中央市場への進出に成功し，大分ムギ焼酎の名を全国に知らしめた（飲酒嗜好地域形成要因９）。

平成以降　平成元年頃より，連続式蒸留しょうちゅうの消費が，愛飲者の高齢化もあって激減してくる（飲酒嗜好地域形成要因10）。

2000（平成12）年以降，全国的なイモ焼酎ブームが大分県域にも波及してきた。特にブームに敏感で，多様な酒類が好まれる都市部においてその影響が顕著であり，「黒霧」ブームが招来して今日に至っている（飲酒嗜好地域形成要因11）。

２）飲酒嗜好地域の展開

前節では，大分県域における飲酒嗜好の形成過程について11の要因をあげながら時代を追って考察を進めてきた。本節では，それを受けて，今日の大分県域における飲酒嗜好地域の展開について明らかにする。第15図が，結論として導き出された飲酒嗜好地域の区分図である。なお，大分県の場合，県域の大半に広がる図中のⅠをベースに地域性を持ったⅡ～Ⅵが，さらに特殊ケースのⅦが重合しているため，図では前者の境界を破線で，後者を点線で表現した。

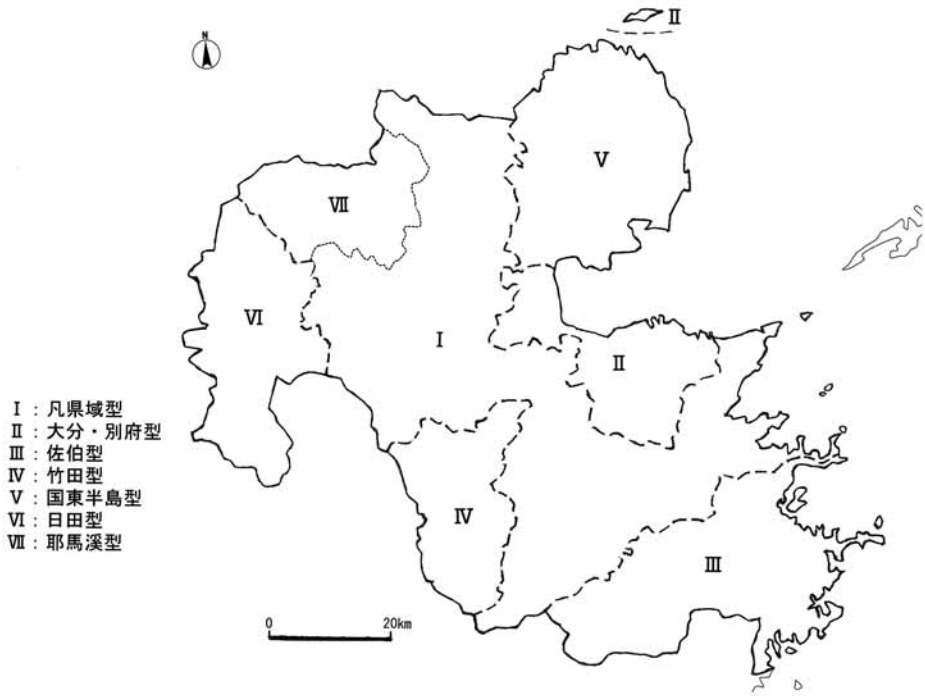
Ⅰ：「**凡県域型**」伝統的な清酒嗜好地域であったところに，1980年頃以降県内大手および，各地地元産の清酒・焼酎メーカーが作るムギ焼酎が加わった。現在の大分県域における基本型である清酒＋ムギ焼酎嗜好地域である。

Ⅱ：「**大分・別府型**」大分県域でも最も都市的な地域である。住民の飲酒嗜好も多様性に富み，ベースである清酒＋ムギ焼酎に加え，近年特にイモ焼酎の消費増が顕著となっている。なお，姫島村は，観光客等の出入りが多く，離島ながらこのタイプに含まれる。

Ⅲ：「**佐伯型**」ここは，もともと九州山地縁辺雑穀（一部コメ）焼酎圏に含まれる地域である。ただし，ここでも現在嗜好酒類のベースは清酒＋ムギ焼酎であるが，これに加え地元産のかつては雑穀焼酎，現在は量的には少ないもののコメ焼酎が嗜好される他，隣接する宮崎県北部からイモ焼酎が流入して愛飲されている。

Ⅳ：「**竹田型**」ここも九州山地縁辺焼酎圏の北縁に位置する地域である。そのため，やはりベースである清酒＋ムギ焼酎に加えてコメ焼酎の嗜好がみとめられる。

Ⅴ：「**国東半島型**」国東市には，現在清酒のナンバー１企業が立地しており，ここもベースが清酒＋ムギ焼酎であることに変わりはない。ただしここは，伝統的に連続式蒸留しょうちゅう嗜好の強い地域であり，多少量的には減らしながらも，その傾向は現在まで変わっていない。



第15図　大分県域における飲酒嗜好地域の展開

Ⅵ：「**日田型**」もともと清酒どころ（一部粕取り焼酎）であったところにムギ焼酎，さらに現在は，おもに他県から流入するイモ焼酎が加わった。日田地方は，福岡文化・経済圏に繋がる地域であり，焼酎類も単式，連続式を問わず25°が愛飲されてきた。

Ⅶ：「**耶馬渓型**」この地域では，中津の業者が作るコメ焼酎が現在ブームを巻き起こしており，福岡県からも来客があるなど，大分県内の他地域とは違った特殊な事例地域である。

5．結　び

本稿の目的は，大分県域における飲酒嗜好の地域的展開とその変容について究明すること，さらに大きな視野で九州・沖縄を含む地域における飲酒嗜好の展開について考察することであった。分析の結果をまとめると，以下のようになる。

1．大分県域は，地形的にも歴史的にも地域的な分断が著しい。そういった分断された地域内で，他地域，さらには他県からの影響を受けながら，独自の飲酒嗜好文化が形成されてきた。

2．酒類ごとの飲酒嗜好にみる特性に関して，本県はもともとほぼ全域で清酒が嗜好されていたが，近年，その消費減が著しい。今日でも清酒が好まれる地域は，大手酒造の所在地，もしくはその近隣市町村であった。単式蒸留しょうちゅうは，かつては消費が少なかったが，1970年代半ばにムギ焼酎の生産発売が始まるとこれが大ブレークし，県民酒と称せられるだけでなく，今日では全国市場においても大きなシェアを誇る状況となっている。連続式蒸留

しょうちゅうの消費も減少が著しいが，今日でも好まれているのは，県の縁辺部，特に国東地方で愛飲されている。

3．地区別に飲酒嗜好の特徴を捉える。a)中津地区：消費が多いのはムギ焼酎，清酒，コメ焼酎である。コメ焼酎が多いのは，ブレークしている特定銘柄が存在するためであった。b)宇佐地区：ムギ焼酎，清酒，イモ焼酎の消費が多い。c)別府地区：ムギ焼酎，イモ焼酎，清酒，連続式蒸留しょうちゅうと続く。別府市は，多様な消費嗜好のみられる都市型を示す。一方，杵築市は，伝統的に連続式蒸留しょうちゅうの強い地域となっている。d)大分地区：ムギ焼酎，イモ焼酎，清酒と続く。ここも多様な消費嗜好のみられる都市型を示す。e)日田地区：ムギ焼酎が特に玖珠・九重町で強い。これに清酒，イモ焼酎が続く。25°焼酎が好まれるなど，福岡文化・経済圏との繋がりが強い。f)臼杵地区：ムギ焼酎は，特に臼杵市で強い。これに清酒，イモ焼酎が続く。g)竹田地区：ムギ焼酎中心。次いでイモ焼酎，清酒，連続式　蒸留しょうちゅうと続く。特筆すべきなのは，コメ焼酎の消費が多いことである。球磨焼酎に代表される九州山地縁辺のコメ焼酎嗜好が当地にも及んでいる。h)三重地区：ムギ焼酎が圧倒的，次いでイモ焼酎，清酒，連続式蒸留しょうちゅうとなっている。i)佐伯地区：ムギ焼酎が圧倒的で，イモ焼酎が続く。もともと九州山地雑穀焼酎圏に属し，現在は宮崎県からイモ焼酎が流入している。

4．飲酒嗜好の形成過程をみると，おもな要因として①初期，清酒と少量の粕取り焼酎生産・消費，②初期，県南地域の雑穀焼酎生産・消費，③明治中頃，自家製酒の禁止による酒造企業の成長，④大正期，連続式蒸留しょうちゅうの流入とその消費拡大，⑤太平洋戦争中・戦後，酒造場の休・廃業とその後の再開，⑥戦後の混乱期における25°から20°への焼酎の転換，⑦昭和40年代末以降，大分ムギ焼酎の生産・消費の始まり，⑧清酒の消費減，⑨ムギ焼酎の中央進出，市場の席巻，⑩平成以降，連続式蒸留しょうちゅうの消費減，⑪全国的なイモ焼酎ブームの波及などがあった。

5．こういった形成要因があって，今日みられる大分県域の飲酒嗜好地域は，７つに分けることができた。すなわち，Ⅰ．大分県主部型：清酒＋ムギ焼酎（本県飲酒嗜好の基層型），Ⅱ．大分・別府型：嗜好が多様な都市型。ムギ焼酎＋清酒＋イモ焼酎他，Ⅲ．佐伯型：隣県の影響を受けて独自の飲酒嗜好地域を形成。ムギ焼酎＋清酒＋イモ焼酎＋コメ焼酎，Ⅳ．竹田型：九州山地焼酎圏影響下にある。ムギ焼酎＋清酒＋コメ焼酎，Ⅴ．国東半島型：清酒＋ムギ焼酎＋連続式蒸留しょうちゅう，Ⅵ．日田型：清酒＋25°ムギ・イモ焼酎，Ⅶ：耶馬溪型：特殊事例としてのコメ焼酎地域であった。

以上をもって，大分県域における研究の所期の目的を概ね達成できたと考える。ただ，調査方法に関して述べたように本研究では，各地域でアトランダムに選定された小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査結果を根本資料として用いた。したがって，地域内全体の飲酒嗜好をかなりの精度で析出することができたと考えるが，場合によっては分析結果にある種偏りの存する可能性を完全には否定しえない。その点については，調査上の限界としてご容赦いただきたい。

九州・沖縄地方を含む飲酒嗜好地域の展開については，先に一部推測を含んで第１図に示した。本稿で明らかにした大分県域における成果をみてわかるように，これに今回の研究成果を書き加えることは，それほど簡単なことではない。というのは，大分県域における飲酒嗜好が，地域的にも県全域においても多様かつ複雑な様相を呈し，他県域と並べての単純明快な地域区

分ができにくいためである。この点については，さらに北部九州の事例を加えるなどして検討を進めていきたい。

［付記］現地調査では，大分県酒造組合（北里陽介専務理事）他，関係機関諸氏のお世話になった。とりわけ，小売酒販店の皆様方のご厚情を賜ることで，聴き取りアンケート調査を遂行することができた。調査に協力してくれた学生諸君ともども記して感謝申し上げる。本研究には，平成22～25年度科学研究費補助金，基盤研究（C）「伝統的飲食文化の展開とそれらを核とする地域振興に関する研究」（課題番号：22520801）の一部を使用した。

注

1）2006年の酒税法改正によって，従来の乙類焼酎を，その製法に因んで「単式蒸留しょうちゅう」と称することになった。
2）同酒税法の改正で，従来の甲類焼酎を，その製法に因んで「連続式蒸留しょうちゅう」と称することとなった。
3）熊本国税局「税務署別酒類販売（消費）数量」（同『熊本国税局統計書』，2004年まで）。2005年以降webページ：http://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/shiori-gaikyo/shiori/01.htm。
4）調査店舗数の市町村別内訳は，中津市７件，宇佐市５件，豊後高田市３件，国東市２件，姫島村１件，杵築市３件，日出町２件，別府市５件，九重町２件，玖珠町２件，日田市10件，由布市５件，大分市13件，臼杵市３件，津久見市２件，豊後大野市５件，竹田市５件，佐伯市９件の計84件である。
5）調査は，①2012年12月８・９日（佐伯・豊後大野・竹田方面），②2013年１月12・13日（中津・宇佐・国東方面），③１月26・27日（別府・宇佐南部・由布方面），④２月16・17日（大分・臼杵・津久見方面），⑤３月６日（佐伯・臼杵方面），⑥３月16・17・18日（日田・中津・宇佐・国東方面）の６回に分けて，一部学生の協力を得て実施した。
6）本文については，大分県広報広聴課（2002）を参照した。
7）大分の歴史については，①農山漁村文化協会（1998），②渡辺（1971），豊田他（1997），竹田市誌編集委員会編（2009），勝目（1954）他を参照した。
8）大分県webページ：http://www.pref.oita.jp/, 2013による。
9）熊本国税局（2013）：「税務署所在地・案内（大分県）」，同webページ：http://www.nta.go.jp/kumamoto/guide/zeimusho/oita.htm。
10）酒造業者に対する聴き取りによる。
11）日本蒸留酒酒造組合（2013）による。
12）ジオパークとは，地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園とされ，委員会が認定する日本ジオパークと，さらに世界ジオパークネットワークの審査認定を受ける世界ジオパークとがある。姫島村（2013）による。
13）日田市の渡辺酒店に対する聴き取りによる。
14）日田地区の伝統魚介料理で盆に主に食される「タラおさの煮付け」は，九州でももともと福岡食文化圏でのみ好まれてきた。ちなみに，タラおさは，タラのエラと胃の干物で北海道方面から持ち込まれる何とも不思議な伝統料理である（ハヌマン編，1990）。
15）豊後大野市（2013）による。
16）熊本国税局データのある1967（昭和42）年当時，大分県内には清酒蔵83と単式蒸留しょうちゅう蔵10など合計100の製造場があった。これが2011（平成23）年には，清酒蔵が17へと激減している。一方，単式蒸留しょうちゅう蔵は，その後のムギ焼酎の成功があって27に増えているが，その他を加えた合計でも63と激減していることがわかる（『熊本国税局統計書』）。

17）佐伯の業者は，当初アワ，ヒエ，コウリャンなどの雑穀を原料とする単式蒸留しょうちゅう作りから始まった。この雑穀焼酎の系統は，球磨から高千穂に至る九州山地縁辺焼酎圏の北縁に位置する（聴き取りによる）。

文献他

岩井正和（1979）：「味づくりに徹し，売るのは口コミ一子相伝 －大分むぎ焼酎の “元祖” 二階堂酒造－」，月刊中小企業31-8，pp.34-37。

臼井麻未・張貴民（2010）：「酒に関する地理学的研究の現状とその課題」，愛媛大学教育学部紀要57，pp.227-236。

大分県広報広聴課（2002）：大分県の自然と風土．webページ:http://www.pref.oita.jp/10400/guide-o/index_jp.html。

小川喜八郎・永山久春・守谷健吉（2000）：『宮崎の食文化誌 －照葉樹林と黒潮の恵み－』，鉱脈社，pp.1-243。

勝目忍（1954）：「豊後日田中城河岸と竹田河岸」，大分県地方史研究３，pp.9-14。

加藤百一（1957a）：「豊後国名酒考覚書（一）」，日本醸造協會雑誌52-5，pp.17-22。

加藤百一（1957b）：「豊後国名酒考覚書（二）」，日本醸造協會雑誌52-6，pp.43-47。

楠田修一（2005）：「大分県酒造会の現状と課題」，おおいたの経済と経営172，pp.1-9。

佐藤有香（2010）：「大分県における酒造業界の現状と課題」，おおいたの経済と経営.1-9。

柴田武（1969）：『言語地理学の方法』，筑摩書房，pp.1-198。

水津一朗（1976）：「酒と文化圏」，地理21-12，pp.19-28。

杉本尚次（1969）：『日本民家の研究』，ミネルヴァ書房，pp.1-302。

竹田市誌編集委員会編（2009）：『竹田市誌 第１巻』，竹田市，pp.1-586。

多田統一（1983）：「ブドウ酒醸造業の勝沼」，地理28-11，pp.78-84。

多田統一（1988）：「統計にみる日本の果実酒類 －ワインを中心として－」，地理33-8，pp.22-28。

寺谷亮二（2002）：「日本におけるワインの生産・流通・消費」，地理47-9，pp.8-16。

時吉修・中村周作（2005）：「宮崎県域における飲酒嗜好にみる地域性」，立命館地理学16，pp.55-69。

豊田寛三・後藤宗俊・飯沼賢司・末廣利人（1997）：『大分県の歴史』山川出版社，pp.1-346。

中村周作（2009）：『宮崎だれやみ論 －酒と肴の文化地理－』，鉱脈社，pp.1-141。

中村周作（2012）：『熊本 酒と肴の文化地理 －文化を核とする地域おこしへの提言－』，熊本出版文化会館，pp.1-215。

日本蒸留酒酒造組合（2013）：「焼酎甲類の歴史」，同webページ：http://www.shochu.or.jp/whats/histry2.html#8。

農山漁村文化協会（1998）：『江戸時代人づくり風土記44 ふるさとの人と知恵 大分』，農山漁村文化協会，pp.1-348。

野間重光・中野元編（2003）：『しょうちゅう業界の未来戦略 －アジアの中の本格焼酎－』，ミネルヴァ書房，pp.30-32。

八久保厚志（1988）：「球磨焼酎産地の形成と市場変化 －近在型工業の成長と存立基盤変化－」，法政地理24，pp.36-50。

ハヌマン編（1990）：『子どもたちへ伝える料理』，（株）トキハインダストリー，pp.1-119。

日野正輝（1988）：「ビールの生産と流通」，地理33-8，pp.46-55。

姫島村（2013）：「おおいた姫島ジオパーク構想」，同村webページ：http://www.himeshima.jp/geopark/geopark/index.html。

豊後大野市（2013）：「観光ポータルサイト 豊後大野」，同市webページ：http://bungo-ohno.info/index.php。

渡辺澄夫（1971）：『大分県の歴史』山川出版社，pp.1-270。